

2010年 冬号

第68号

僧伽編集委員会

〒921-8031
金沢市野町2丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241-5219
題字 本多 千翠

僧伽



悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ること喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。

『教行信証』

『教行信証』
親鸞聖人の残された
最も代表的な論文。

癒しをもとめる心

徳法寺 杉 谷 浄

南の国を旅していると、日本に

てくれるのでしょうか。

いる以上に様々な動物たちとの出会いがあります。上の写真はペルーのレストランで食事をするときに一緒になったリヤマという動物です。イランではラクダたちと食事をしましたし、パキスタンでは羊たちと一緒にバスに乗ったこともありました。羊飼いがいきなりバスに十数頭の羊と一緒に乗り込んできたときは、さすがに目が点になりました。もちろん彼らは家畜であつてペットではありません。それでも彼らとの出会いは旅の途中での心温まる一時であつたことは間違えありません。

親鸞聖人は、自分が海のように広く深い愛欲に沈み、山のように高く深い名誉・虚栄に迷い込んでしまつていて、心安らかなことなど望んでいないという事実を見つめ、そのことに対して、恥ずかしく痛ましいことだと思わなければならぬとおっしゃっています。愛欲も名譽欲も相手がなければ生まれるものではありません。つまり、人間は同じ人間の中にあることでストレスを感じてしまうということです。人間の密度が濃くなればなるほど、このストレスは強いものになるようです。

このような人間の社会で、無条件でこちらを受け止めてくれ、こちらは何の虚栄を張る必要のない動物たちとの触れ合いは、昔から私たちが癒し続けてくれていたのだでしょう。動物たちを求めるときは、私たち人間の互いに必要としながらも反発しあうという悲しい性の裏返しなのかもしれません。

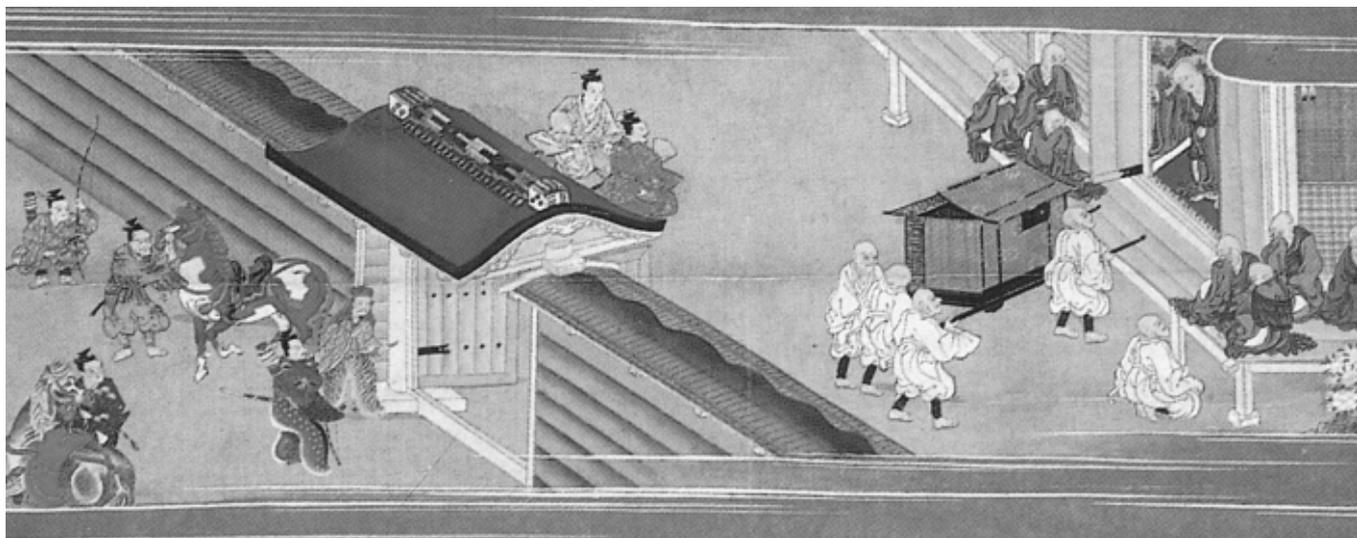
「御絵伝」でたどる 親鸞聖人のご生涯 (13)

法然配流

法然上人に深く帰依していた九条兼実の次男九条良経が元久三年(一二〇六年)に寝所で何者かに暗殺されると、法然門下に対する風当たりは一気に強いものになりました。建永二年(一二〇七年、承元元年)二月二十八日には法然上人がおられた吉水禅房が閉鎖され流罪が言い渡されます。そのため、法然上人は一旦兼実の所有していた小松谷の御堂に移ります。その後三月十六日には洛外の法性寺入られ、十八日早朝、都を後にして流罪先の土佐の国へと向かわれました。その様子がこの御絵伝です。

右の建物の中から出ようとなさっているのが法然上人です。縁側には別れを悲しんでいる僧たちがいまふ。法然上人の門弟の中でも一番の高弟である信空が罪を免れるための方法を提言すると、法然上人は「私は決して流罪を恨みには思っていない。いづれにしてはいいません。いづれにしてもすぐに皆とは別れなければならぬ老齢です。今まに都にばかりいましたが、これからは地方に行つて念仏をひろめることができるので、むしろ朝廷には恩を感じているほどです」とおっしゃったそうです。建物の外で輿の周りにいる白い衣装を着ているのは、

力者法師と呼ばれる剃髪した中間です。法然上人に向かって何か話しているように見えるのは、信濃の御家人で成阿という方です。最後のご奉公と自らこの役をかってでたのです。一見立派そうに見える輿も、ただ板を渡しただけの張輿で、そのあまりのみすぼらしさに弟子たちが嘆いていると、「火の車の代わりだと思えばこんなありがたい話はない」と法然上人は笑つておっしゃったそうです。門の外には、法然上人の出立を見届ける役人や、配流地まで送り届ける役人などが描かれています。兼実の尽力により実際には法然上人は土佐ではなく兼実の領地がある讃岐に流罪となりました。その兼実もその一月後には死去してしまします。それでも九ヵ月後の十二月には仮赦免で摂津の勝尾寺にまで帰つてこられます。都に帰ることが許されるのは三年後になります。しかし帰られて二ヵ月のうちに示寂なさいます。八〇歳でした。この御絵伝で、法然上人は僧の衣装で描かれていますが、実際には罪人の衣装であつたと思われまふ。ただこの絵を描かせた覚如上人がそれでは恐れ多いというこでこのように描くように指示したと伝えられています。(浄)



和讃に学ぶ

第三十回

常德寺 西山 彰

定散自力の称名は
果遂のちかいに帰してこそ
おしえざれども自然に
真如の門に転入する

「定散自力の称名」とは、自力の心をもつて名号をとなえ、その功德によつて往生しようと願う念仏のことである。平たく言えば、わが身可愛さで申す念仏のことである。

真宗では、そのような念仏を申す者は、浄土に生まれることはできるが、端の方(辺地)にしか生まれることができないと教えている。このあたりが真宗の教えの大変特徴的なところである。一旦自力の称名を否定しながらも、そのような念

仏を申す者でも、条件付で浄土に生まれることができるのである。その誓いを「果遂のちかい」という。

この和讃を頂くとき、歎異抄の第十七条を思い出す。そこでは、たとえ辺地に往生しても、「うたがいのつみをつぐのいてのち」、真実報土(浄土の真ん中)に往生できると述べられている。

ここで、「うたがいのつみ」という言葉には「つみせられる。一見他力の念仏にすがっているように見えて、実際には自力を頼みにする心から一步も出ていないというのが、「自力の称名」である。それは「他力のなかの自力」ともいわれている。そしてそこにあるものは、「うたがい」なのである。

ある。では何に対する疑いなのかといえ、仏に対する疑いである。

自力に対する執心から離れられないのは、仏に対する疑いを拭い去れないからである。一見仏に帰依しているように見えながら、心のどこかで疑っている。これを「うたがいのつみ」と歎異抄で述べているのである。

しかし、これは罪と云うにはあまりに厳しい指摘である。では一体私たちはどうすればよいのかと立ち尽くすしかないのである。

で、これらの指摘は我々の有様を示していると考えてみればどうだろう。つまりどれだけ真面目に念仏申したとしても、「自力の念仏」から出ることができないという事実。私たちこの身に於ける事実を示していると頂いていくほかはないのである。

そのことに気が付くならば、仏の本当の願いは、そういう私たちの限界の先にあるものなのだということも、おのずと見えてこよう。そのときはじめて、仏の願いに生きるといふ道が開けてくるのである。

そのことを、「うたがいの

つみをつぐのいてのち」、真実報土(浄土の真ん中)に往生できると言っているのである。

この歎異抄の記述は、和讃の「おしえざれども自然に 真如の門に転入する」という言葉と、ほぼ同義であることは明らかである。最後にこれら一連の議論は、私たちが念仏を頂くところから始まっていることを付け加えておきたい。まさに「はじめに行あり」(本の紹介「欄参照」)なのである。それは名号不思議の信心と言うべきであろう。

平成二十二年 年忌法要の案内

- 五十回忌 昭和三十六年死亡 十三回忌 平成十年死亡
- 三十三回忌 昭和五十三年死亡 七回忌 平成十六年死亡
- 二十五回忌 昭和六十一年死亡 三回忌 平成二十年死亡
- 十七回忌 平成六年死亡 一周忌 平成二十一年死亡

真宗人物伝

第十七回

常德寺 西山 彰

教如上人

今回は、東本願寺の初代とも言える、本願寺第十二世教如上人についてご紹介したいと思います。

教如上人は、永禄元年(一五五八年)九月十六日、顕如上人の長男として誕生なさいました。

時は戦国の世。織田信長との間で石山合戦が始まります。そんな中で成人された教如上人は、合戦末期には父顕如上人を補佐して活躍されました。

天正八年(一五八〇年)三月、顕如上人は信長側からの講和の申し入れを受け入れ、石山本願寺から紀伊鷺森(和歌山県和歌山市)へ退去し隠居されます。

しかし教如上人は、信長を信用せず徹底抗戦を主張

されました。

それには理由がありました。長島一向一揆において、信長は和睦成立後に、それを反故にし一揆勢を虐殺した前例があつたためです。

顕如上人は、そんな教如上人を義絶してしまわれ、山本願寺に籠城された教如上人でしたが、ついに説得に応じ、信長に石山本願寺を明け渡されたのでした。石山本願寺に火が放たれ灰燼と化したのは、その直後でした。

一方、天正十年(一五八二年)、本能寺の変が起り、信長は自害します。それに伴い、教如上人は顕如上人より義絶を赦免されます。

やがて文禄元年(一五九二年)、顕如上人は示寂され、教如上人は本願寺を継承さ

れます。このとき教如上人は、石山合戦で籠城した強硬派を側近に置き、顕如上人と共に鷺森に退去した穏健派を重用しませんでした。このことが教団内での対立を引き起こします。

文禄二年(一五九三年)九月十二日、突然秀吉は教如上人を呼びつけ、十年後に弟の准如に本願寺法主を譲るように命令します。その裏には、穏健派の秀吉への働きかけがあつたと考えられます。

この事を聞いた強硬派の坊官が、秀吉に異義を申し立てるのですが、そのことが逆に秀吉の怒りを買いました。結局、准如に法主を継承する事が決定し、教如は退隠させられることとなりました。

慶長五年(一六〇〇年)の関ヶ原の戦いで、天下の実権は豊臣家から徳川家へと移ります。家康は、教如上人を法主に再任せようと考えます。なぜなら上人は、関ヶ原の戦い前夜、家

康のために命がけて諜報活動を行われた経緯があつたからです。

ところが重臣の本多正信は、本願寺の准如と教如との対立はこのままにしておき、徳川家は教如を支援して勢力を二分した方がよいと考えます。この提案は採用され本願寺は分立することとなります。

家康より京都七条烏丸に土地が寄進され、慶長八年(一六〇三年)、東本願寺が分立します。

上人は慶長十九年(一六一四年)十月五日、五十七歳の生涯を閉じられました。以上教如上人のご生涯を追ってきました。波乱万丈のご一生は、不器用なくらいの実直さに貫かれていますように思います。



杉谷浄の

ラジオ案内

一月五日(火)
二月二日(火)
三月二日(火)
四月六日(火)

の午後一時半からFM・N1(七十六・三MH)で放送します。再放送は放送日の週の土曜夜八時からです。インターネットではいつでも聞けますのでよろしければ聞いてください。

『心の相談室』

毎月第四土曜日
午後三時～五時
東別院横

「いちよう館」二階
相談料無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等に、僧侶が対応します。

真宗豆知識

一向宗は浄土真宗？

戦国時代に織田信長や上杉謙信と本願寺門徒が戦ったことを一向一揆と言いますが、この「一向」とは何かご存知ですか。一般には浄土真宗の別名が一向宗であるといわれます。歴史の教科書などにもこのように書かれていますから、今はこれで正解なのでしょうし、私も普通に「一向一揆」と言っています。

でも、北陸に本願寺門徒を増やした蓮如上人は、自分達が一向宗と呼ばれることを快くは思っていないませんでした。この事は蓮如上人が書かれた手紙（お東では『お文』お西では『御文章』と言います）に残っています。それを現代語に訳すると次のような内容になります。

「私たちの宗派を、私たちの宗派内からもまた他の宗派からも一向宗という名前

で言うことは、とても納得できることではありません。宗祖の親鸞聖人はこの宗派を最初から浄土真宗とおっしゃり、そのように定めています。他の宗派の人が一向宗と言うのは仕方がないとしても、私たちの宗派のもの、自分は一向宗であると言うことは大変な間違いです。私たちの宗派は他の浄土宗よりも優れた教えであるから、親鸞聖人がわざわざ真の字を置いて浄土真宗と定めました。丁寧に言えば浄土真宗、略して言えば真宗と言うべきです。」

また他のお手紙にはこのようにもあります。

「私たちの宗派をこちら側から一向宗と名付けることは有りません。親鸞聖人は浄土真宗とわざわざ決めていかれたのです。経文に「一向専念無量寿仏」と説かれています。ここに、一向に専ら無量寿仏を念ずとあることから、皆がこぞつて一向宗と言っているようです。このことからすれば問

題がないようにも思えます。ですが、親鸞聖人は私たちの宗派を浄土真宗とおっしゃっておられるのです。ですから一向宗という言い方はしません。」

また次のようなお手紙もあります。

「私たちの宗派の名前を自他ともに以前から一向宗と呼んでいることは大いなる誤りです。このような名前は親鸞聖人によつて決められたことはありません。親鸞聖人は書かれたものにもかかわらず他宗が私たちを一向宗と言うことは信じられないことです。それどころか私たちの宗派の者までが、私是一向宗である」と名乗っている始末です。一向宗と言うのは時宗の別名前です。一遍上人、一賀（賀）番場にある道場（蓮華寺）こそが一向宗です。」

この三つの手紙をみますと、浄土真宗を一向宗という言い方で当時言われてい

たことは事実のようです。しかし蓮如上人は、親鸞聖人以来、私たちの宗派は浄土真宗、もしくは真宗であり、一向宗と名乗ったことなどないとかかなり強い口調で言っていることがわかります。

ではなぜ一向宗と言われるようになったのでしょうか。二番目の手紙には、一向に専ら阿弥陀仏を念ずる教えであるから、このような言い方が広まった、と言っています。三番目の手紙には、一向上人の名が出てきます。この手紙の中では、時宗の別の呼び名とされていますが、同じ浄土宗の流れの中に、一遍上人の開かれた時宗と、一向上人の開かれた一向宗がありました。時宗と一向宗は、他の浄土宗のように様々な修業をすることをせず、念仏だけを説いていたため、周りからは真宗との区別がつきにくかったようです。それどころか、それぞれの教えを聞いている者までもが、自分達は時宗なのか一向宗なのか真宗なのか分かってい

なかつた可能性があります。見た目は同じに見えても教えの中身はかなり違っていますから、よく聴聞していけば分かるのですが、皆が教えを理解しているわけではないのは今も昔も同じです。一向宗が盛んであった東北、尾張、北関東、近江、北陸は本願寺門徒と重複するためなおのことです。蓮如上人は、自分達は一向宗ではなく真宗であるということを強調することで、教えの違いをより明確にしたかったのかもしれない。

今是一向宗という宗派はありません。徳川幕府の命令で時宗に統合され、今は旧一向宗の寺院は浄土宗に帰属しています。消えてしまった宗派の名前が、蓮如上人があれほど嫌っていたにもかかわらず、本願寺門徒の戦いの名前の中で生き残っていることも歴史の悪戯（いたづら）かも知れません。

本の紹介

「曾我量深集」

上・下

真宗大谷派出版部

うまでもなく、写経はいいことなのだ。

数学と仏教との違いだと

言ってしまうばそれまでだ

しかし、意味も分からない

まま經典を読んだり写した

りすることにどれだけ意

味があるのだろうか。また、

ただ訳も分からずに「南無

阿弥陀仏」と称えていると

したら、それでいいのだら

うか。

教学的には、念仏という

行は、我々衆生を救わんと

して、如来が与えてくだ

さつたものとされている。

だから私たちの口について

お念仏が出てくるのは、如

来のはたらきであるという

ことになる。これは本誌で

もたびたび紹介してきた如

来回向ということである。

しかしもつたいないことで

はあるが、ながらもなかなか

了解したいこともある。

そんなことを考えながら、

「曾我量深集」のページをめ

くつていると、「はじめに行

あり」と題された一文が目

に飛び込んできた。

曾我量深はこのなかで次

のように述べている。

「はじめに行がある。まず

行から出発するのでしよう。

行を前提として、それから

さらに、我われは、その行

をわが行にしていく。……

(中略)……行を前提として、

我われの自覚ということが

ある。行なしに自覚という

ことを考えるのは無行人で

ある。(傍点筆者)」

まず念仏という「行」が

あり、その行が自らを照ら

すとき、「自覚」へと繋がっ

ていくのだろうか。そこには、

行を自分の行にしていくと

いう営みが必要なことは言

うまでもない。そこに聞法

をも含んだ念仏者の歩みが

あるのだろうか。でなければ、

数学の宿題で答えを丸写し

する生徒を笑えない。經典

も同様であろう。

「はじめから理屈がある

のなら大変です。人間は救

われぬ。」とも曾我は述べ

ている。私は、教育現場に

仏教的な考え方を取り入れ

てもいいのではないかと考

える者の一人である。提出

期限に追われて数式の写

経にいそしむ生徒の苦勞

も、少しは認めてやってい

いのではないかとも思う

のである。(彰)

◎お講 (石坂同信会主催)

毎月二十一日

午後七時半より

講師

一月 杉谷 淨

二月 杉谷 淨

三月 杉谷 淨

四月 細川 公英

※二月は法話の後、新年会
を行うため、六時始まりで
す。新年会参加費は一、五
〇〇円です。参加される方
は前日までにお知らせ下さ
い。

毎月のお講同様にどな
たでもご自由にご参加く
ださい。

◆常德寺

金沢市寺町

五丁目一番二九号

☎二四一―二六四九

各寺のご案内

◆徳法寺

金沢市野町

二丁目三二―四

編集委員

西山 彰 (常德寺)